

小田の池と歴史

～歴史は小田の池周辺から始まった～

小田の池周辺には、山下池と立石池の3つの湖がありますが、これらの池の周辺からは、旧石器時代から古墳時代までの石器や土器が多く出土しています。

平成3年12月に小田の池の東側の取水口の近くで石の鏃と黒曜石の石器が発見されました。

山下池では、昭和51年の大分中部地震で池の堤防がこわれ、湖底の半分以上が顔を出したときの調査で縄文時代の前期、中期、後期に渡る土器の石器が発見されています。

このことは、小田の池の周辺には古くから人が生活していたことを証明するものです。

私たちの祖先は、小田の池の周りでどのような生活をしていたのでしょうか。

旧石器時代

(BC 2百万年～BC 1万年)

この頃、日本は大陸と陸続きでナウマン象もいました。

人間は、えものをとったり、魚や草や木の実を食べて暮らしていました。

えものを狩るモリやヤリは打製石器と呼ばれる、石を打ち欠いて作った簡単なものでした。

そまつな武器しかなかったので、みんなで力を合わせてえものに立ち向かっていました。



小田の池周辺から発見された石器



縄文時代

(BC 1 万年～BC 3 百年)

縄文時代には、弓矢が発明され、土器を使う生活も始まりました。

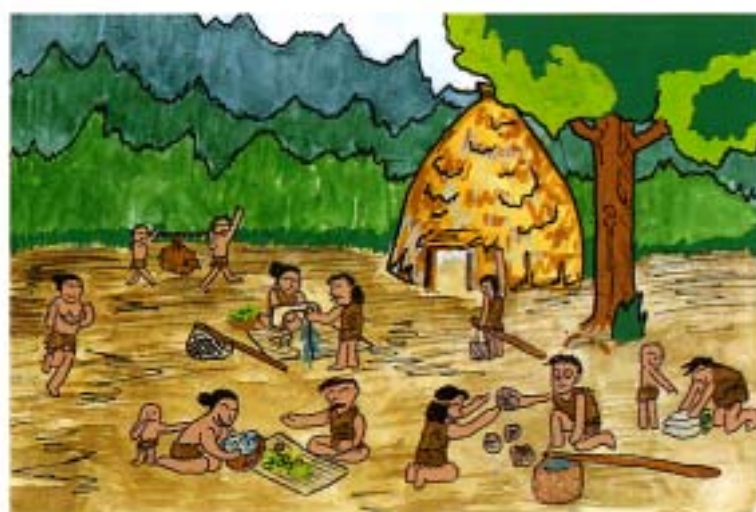
弓矢が発明され、えものを狩るのにたいへん便利になりました。

縄文土器は、粘土をひも状にして回しながら積み重ね形を整えて表面を平らにして縄で模様を作り、10日間ぐらいかけ干して枯木などを燃やして焼きました。

小田の池の周辺の人々は、けもの毛皮や肉、やまいも、木の実などを持って四国や佐賀の腰岳、姫島などに行き、物々交換により矢じりやモリ・ヤリなどを造るのに必要な黒曜石を入手しました。

縄文時代の後半になると、人々は、えものが多く、水のあるところで、竪穴住居を作り、定住するようになりました。

小田の池周辺では、土器や石器が発見されているのですから、いつかは縄文時代の人々の住居跡も発見されることでしょう。



弥生時代以降

(BC 3 百年～)

紀元前300年頃（縄文晩期）から、日本でも稲作が始まり、金属器が伝わり、弥生土器を使う新しい文化が生まれました。

この頃に小田の池周辺の人々も稲作をし易い低地である由布院盆地へ降りて定住し、ムラを作ったと考えられます。



現在の由布院盆地

イラスト／大津津公（大分県立緑ヶ丘高校2年生）

奥江地区に人が定住して、稲作農業が営まれるようになると、小田の池の水を農業用水として利用するようになりました。

しかし、わずかな湧水と、蛇越岳の斜面等に降る雨水だけから成り立つ小田の池の水量では農業用水として不十分であったため、人々は小田の池の貯水量を増やす工夫をしました。

ひとつは、蛇越岳から野稲岳の尾根に降った雨水を小田の池に集めるための集水路―野井手―が作ら

れました。

ひとつは、池の西側の低い部分に1 mほどの石積み

が作られました。また、このようにして溜められた水を有効に利用するための取水口や用水路―上井手―が小田の池から奥江の部落の間に作られました。

ただ、稲作が少なくなった今では、野井手も上井手も荒廃したまま放置され、地元の人々にも忘れ去られようとしています。



池の西側の石積み



小田の池の貯水及び用水路



野井手が作られた蛇越岳



コンクリートえん堤の放水口